秋葉街道案内資料 I

「浜松から鹿島へ」

○　秋葉山と秋葉信仰

現在，秋葉山には，山頂近くに「秋葉山本宮秋葉神社」の上社があり，山頂より少し下った杉平に「曹洞宗秋葉山秋葉寺」があって，信仰の山としてその両輪を形作っている。それぞれ発行している縁起には，明治の初めに至る解釈に異なるところがある。

秋葉寺は，「秋葉寺略縁起」によると，行基が秋葉山山頂に聖観世音菩薩を本尊とする大登山霊雲院を創建し，その後三尺坊大権現の出現により「秋葉山秋葉寺」と改められたという。「秋葉山略縁起」（寛政３年の写し）では，「大登山秋葉寺」となっている。

平安時代から鎌倉時代を通じて発達した修験道の霊場の一つとして，三尺坊により秋葉修験の基礎が据えられ，守護神となったことにより三尺坊の霊験への信仰が高まったと推定される。

江戸時代中期以降，三尺坊大権現の火防の神としての信仰が急速に広まり，講の組織が全国的に作られるようになった。そして，お札を受けるために秋葉道者となって代参をした。また村の辻には秋葉山常夜灯やその鞘堂（龍燈）が建てられるようになった。

明治時代になり，神仏分離政策により秋葉寺は廃寺となり，諸仏や仏具は一時，本寺である可睡斎（袋井市）に移された。その後可睡斎には秋葉総本殿に三尺坊大権現（本体）が祀られ，また明治１３年に秋葉山秋葉寺が現在地に再興されて三尺坊大権現（分体）が祀られ，それぞれ信仰されている。

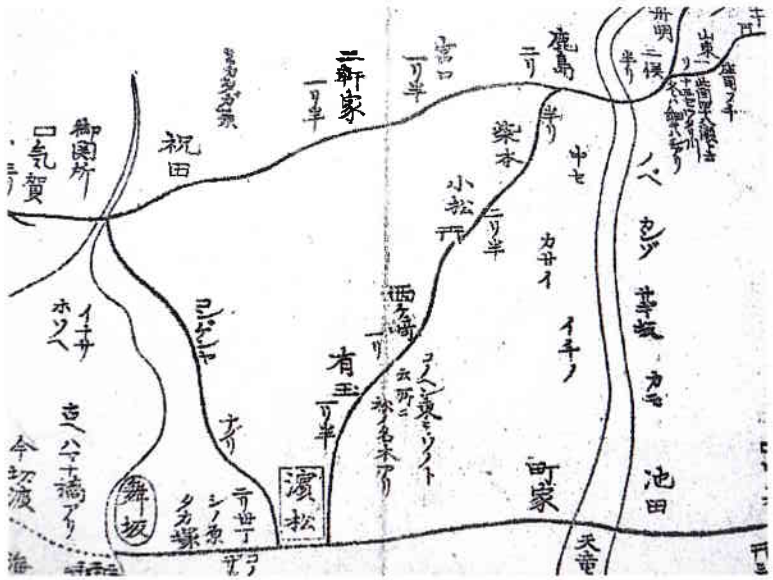
秋葉神社は，縁起によると，秋葉山には往古「火之迦具土大神」を祭神とする「岐陛保神社」があり，中世には秋葉大権現と称していたが，明治の神仏分離により，「秋葉神社」と称するようになったという。さらに昭和２７年「秋葉山本宮秋葉神社」と改称され，火防開運の神として信仰されている。

○　秋葉街道

秋葉街道は，江戸時代は「秋葉道」と呼び，幾筋もの道がある。特に代表的なものとして，関東方面からは、東海道を西に向かい，掛川宿から分岐して森，三倉，犬居を経て秋葉山をめざす。関西からは，東海道を東に向かい，浜松宿から鹿島を経て秋葉山に向かった。また，御油から姫街道を東に向かう道筋などもあった。

本資料で扱う浜松から秋葉山までの里程は，江戸時代後期の「秋葉山参詣道法図」では「九里余」。浜松から鹿島までの里程は，次のようである。

浜松～有玉	一里半	有玉～西ヶ崎	一里
西ヶ崎～柴本	二里半	柴本～鹿島	半里



「秋葉山参詣道法図」より

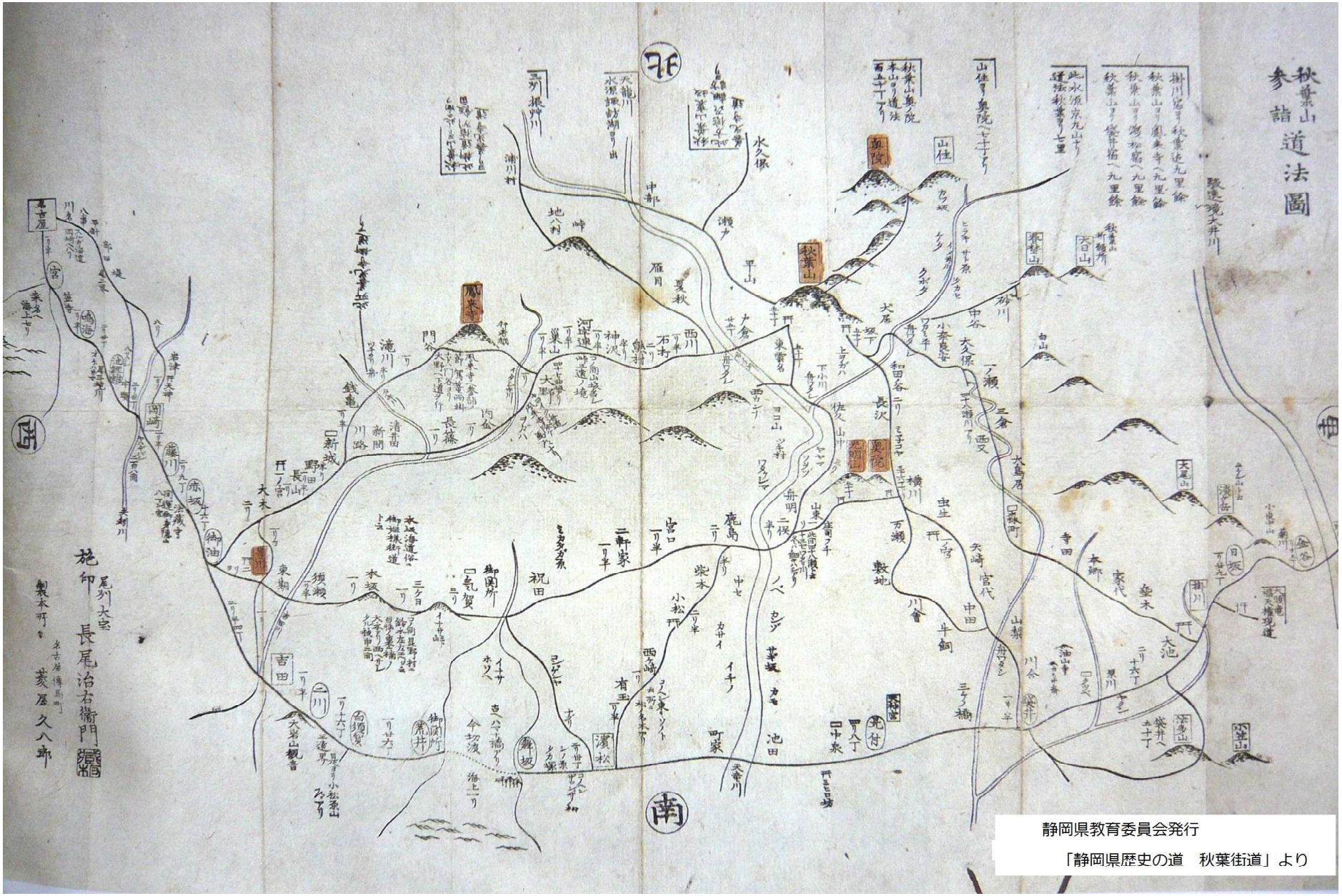
○　秋葉街道の道筋の復元について

本資料の秋葉街道の道筋は，江戸時代の道に最も近いと思われる大日本帝国陸地測量部が明治２３年に測量した二万分の一の地図をもとにし，地元の人の話も聞き，現在の地図上に復元した。現在の地図は，国土地理院の「電子国土ポータル」を活用した。不正確な部分があると思われるが，今後修正をしたい。。

○　参考文献

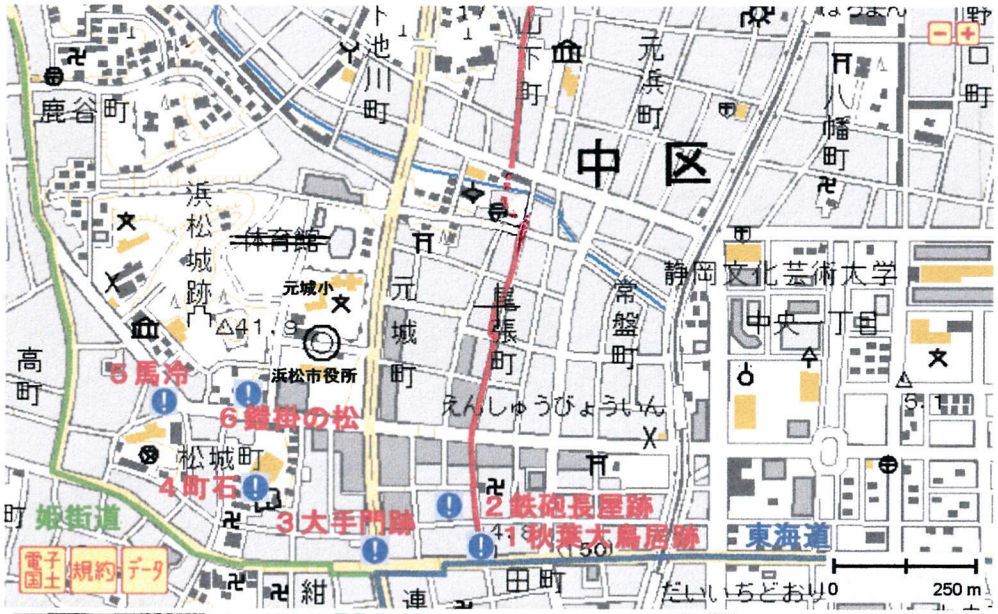
秋葉街道	静岡県教育委員会
浜松市の石造文化財	浜松市石造文化財調査会
浜松の史跡・続浜松の史跡	浜松市史跡調査顕彰会
天竜川と秋葉街道	神谷昌志
浜松歴史散歩	神谷昌志
ふるさと歴史ガイドブック	二俣・光明編　天竜市役所
浜北市の年中行事・文化財	浜北市教育委員会
龍燈・秋葉山常夜灯	浜北市教育委員会
遠州山辺の道	浜松市
路傍の神仏と道標	浜北文化協会郷土史部
愛称標識　中央・曳馬・積志	各地区愛称標識設置委員会

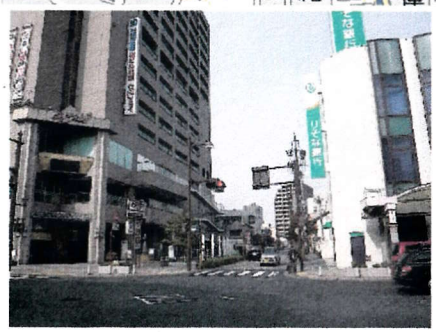
作成　平成２３年１月２０日　改訂　平成２５年５月１日
浜松市浜北区寺島８１６　太田隆雄　TEL０５３－５８７－３０６３



静岡県教育委員会発行

「静岡県歴史の道　秋葉街道」より





昭和初め頃の大鳥居
（写真は神谷昌志氏蔵）

1　秋葉大鳥居跡

江戸時代，秋葉信仰が盛んになり，上方方面から東海道を下った人々は，浜松宿田町から秋葉詣りに向かった。そのため田町の分岐点（現在ビオラ田町東側）には，木造の鳥居が建てられた。嘉永２年（１８４９）隣の神明町火災の際，田町には大過がなかったので，「これも秋葉様のおかげ」と報徳の仕法により集められた３５８両をもって，文久２年（１８６２）青銅製の大鳥居（柱の直径約１ｍ）に造り替えられた。柱の中には経石が詰め込まれていた。しかし，太平洋戦争中の昭和１７年（１９４２）金属回収のため供出されてしまった。

2　鉄砲長屋跡（鉄砲小路）

かつて元城町の入口には浜松城の大手門があった。そのため，敵の攻撃を防ぐ目的で池町には鉄砲長屋があった。長屋のすぐ北には馬場があり，常に敵が攻めてきた時を想定して備えをしていた。

3　大手門跡

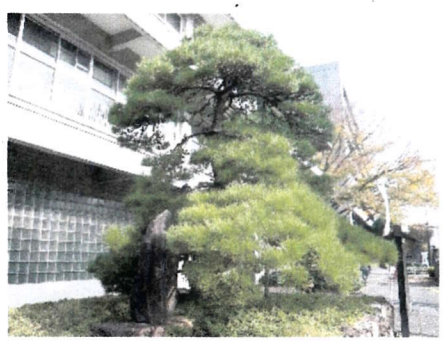
浜松城の正門つまり大手門がこの付近の道路の中央にあった。南面する間口は８間（約14.6m），奥行４間（約 7.3m）の瓦葺きの建物で，常に武器を備え，出入りが厳しく取り締られていた。門をくぐると左右に侍屋敷が並び，筋違橋厩（うまや）・明光寺門が続いた。

4　町石

浜松市立中央図書館の敷地内にある。灯籠型の町石（道のりを示す石柱）で「第三町」と刻まれている。美濃国岩村の某が奉納した。もとは下平山（天竜区竜山町戸倉）の秋葉山参道にあったものが個人蔵になり，現在地に移転したといわれる。（秋葉山の参道は５０町あり，道筋には１町目ごとに町石が建てられていた。）

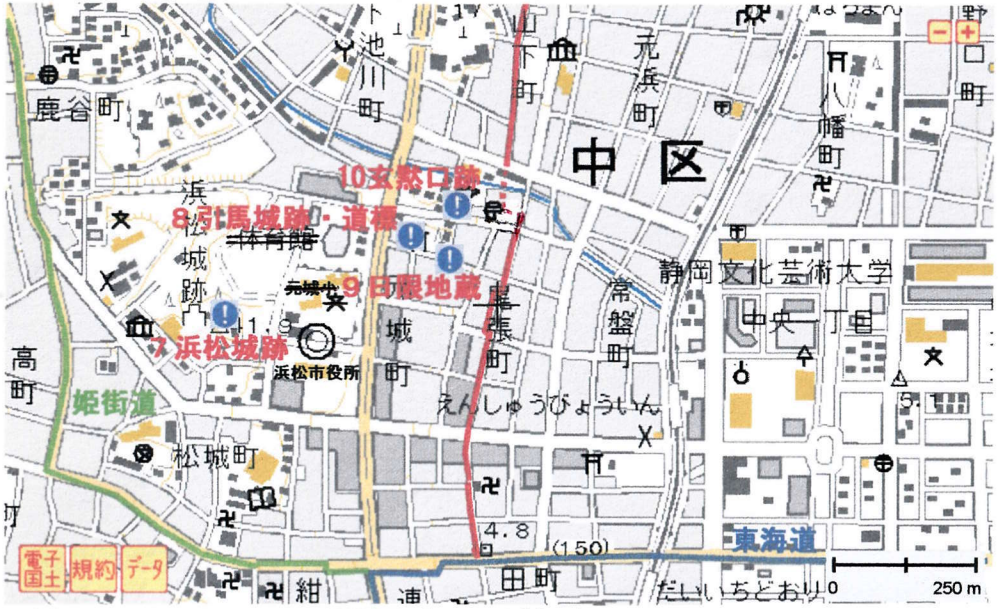
5　馬冷（うまびやし）

江戸期から明治１５年（１８８２）の地名。地名の由来は，藩士が乗った馬を冷やした天然の池があったことによる。安政年間（１８５４～１８６０）の「浜松城略絵図」によれば，馬冷池の西に武家屋敷，南に小立山があり，小立山の東西の谷には清水が湧いていた。小立山の西，高町口には馬番所が設置されていた。



6　鎧掛松

かつて浜松城の南堀の東に「包丁堀」と呼ばれる水堀があり，その近くにあった。元亀３年（１５７２）家康が三方原合戦から城に帰り，大きな松の下で休み，鎧を脱いでその松に掛けたことから，鎧掛松と呼ばれている。現在の松は元城町の人々によって植樹された３代目である。



7　浜松城

徳川家康は永禄１１年（１５６８）三河から遠江に進入，永禄１２年までに遠江国内をほぼ平定した。家康は引馬を「浜松」と改め，引馬城を拡張し浜松城を築いた。在城中に，地形を利用して，最も高い所に天守曲輪，東に本丸，二の丸，西には作左曲輪を配したという。堀を隔てた南部の高台には出丸も造られ守りを固めた。家康は武田氏滅亡後，三遠駿甲信の五カ国を領有し，天正１５年（１５８７）本拠を駿府に移して，浜松には城代を置いた。

天正１８年（１５９０）豊臣秀吉が天下を統一すると，家康は関東に移封され，浜松城主は豊臣系の堀尾帯刀吉晴となった。これにより浜松城は大規模改修され，天守閣をはじめとする瓦葺きの建物や石垣が造られた。

石垣は，自然石を上下に組み合わせて積み上げる野面積（のづらづ）みで，表面には隙間があるが，奥が深く堅固である。石材は浜松市内の大草山，根本山，湖西市知波田産の珪岩で，浜名湖や佐鳴湖の水路を運ばれた。今も４００年の風雪に耐え，戦国時代の面影を残している。

慶長５年（１６００）関ヶ原の戦いで家康側が勝利して以後，徳川譜代の城となった。浜松城は別名「出世城」といわれ，再任を含め２５代の城主が在城したが，水野忠邦など多くの大名が老中などの幕閣となっている。

8　引馬城跡・道標

中世の城館である。当時の東海道と天竜川が交差する地点，浜松八幡宮から早馬町にかけて「ひくま」宿があり，丘の上に引馬城があった。１５世紀には存在したと考えられる。支配権は変転し，今川氏の宿将飯尾豊前守の居城となった。そのころの城域は，方形の堀に囲まれた１００ｍ強の範囲である。その後家康が攻め滅ぼし，引馬城を拡張して浜松城を築いた。古城（引馬城跡）には侍屋敷や米蔵があった。現在，東照宮が建てられている。

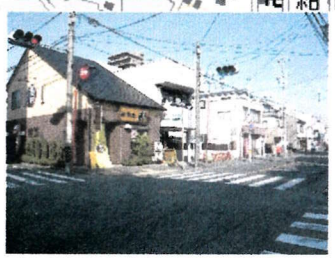
東照宮の西側に白山権現道の道標がある。上部が欠損している。正面に「□□権現道」，右に「□□□んごんげん道」，左に「康松院二諦坊」と刻まれている。元の場所は不明である。鴨江寺の鎮守白山権現への参道を示すものである。

9　日限地蔵尊

文政６年（１８２３）田町の富豪笠井屋呉服店のあるじ小野江善八が邸内に土蔵を作ろうとして掘り出された地蔵であるという。お堂を建ててお祀りしたが，その後一般の人々が管理をしてきた。空襲の際にお堂の下の防空壕に逃げ込んで一家が生命をとりとめたともいう。別称を蔵衛地蔵という。願い事は何でもよいとのことである。

１０　玄黙口跡

玄黙口は浜松城の北東，今の元目町北通りと新川の中間にあったとされる。元亀３年（１５７２）三方原合戦に敗れた家康や味方の兵たちが逃げ込んだという。また，天正１４年（１５８６）秀吉の使者が大手門から謁見を求めてきたが，家康は許さず，玄黙口から廻らせたという。



元目町の秋葉街道

六間通り北側の秋葉街道へ

田町を起点にして北に向かった秋葉街道は，元目町の郵便局辺りで枡形となっている。枡形は左に折れ，数十メートルでまた右に折れて新川を渡り北へ向かうが，現在は存在しない。

迂回路は郵便局前を北に進み，六間通りの交差点を越え，西５０ｍにある秋葉街道に入る。

１１　本田技研発祥の地・蛇屋敷跡

六間道路の南側にある。ここに自転車にエンジンを付け，白の丸いガソリンタンクを付けた「ポンポン」の製造工場が生まれた。この地は，江戸時代に曹洞宗の尼寺があり，東海道一の尼寺として全国に知られていたが，明治６年（１８７３）に廃寺となった。尼寺跡は大正年間まで「蛇屋敷」と呼ばれていた。

１２　百軒長屋跡

新川に架かる「ごじょうばし」から「常磐橋」に至る川沿いにあった。明治元年（１８７８）浜松藩の井上正直が上総の舞鶴へ転封され，代わって徳川家達の家臣たちが浜松に入り，新しい仕事に従うことになった。その士族たちがこの辺りの長屋に住むようになった。

１３　八幡宮道標

常磐橋の南，遠鉄ガード下にある。「従是八幡宮道」とあり，明治３８年３月に建立された。ここから東北へ続く細い道があって浜松八幡宮に通じていた。建立時期は日露戦争のさなかで，武運長久の祈願で多くの参拝者があったため建てられたものと思われる。

道標のすぐ横には，秀忠誕生の下屋敷に因んで付けられた誕生橋があり欄干がある。

１４　秀忠誕生の井戸

誕生井戸はここの西方約５０ｍの所にあった。その一帯は家康在城当時は下屋敷があり，側室の西郷局が同下屋敷で秀忠を出産した。その時使われた産湯の井戸で，明治の頃まで残っていたという。

誕生井戸の由来を記した灯籠は，もと分木橋の親柱で，もう一基は浜松城本丸にある。

１５　黒衣（こくえ）地蔵と地蔵発祥の地碑

正保年間，市野村の庄屋勘右衛門が殿様の道案内をしていると，田の土の中から呼ぶ声がした。掘ってみると１ｍ程の真黒な地蔵が出てきたので喜んで供養をした。その夜，「萬福寺に祀ってくれ。その代わりに何でも願いをかなえる。」という地蔵のお告げがあり，萬福寺に祀っていただいた。数年後，勘右衛門が武士の試し斬りにあったが，地蔵が身代わりとなり助かることができた。それからこの地蔵は身代わり黒衣（こくえ）地蔵尊とあがめられ，萬福寺では毎年供養が行われている。

１６　秋葉常夜灯

浜松八幡宮前の公会堂に建てられている。鞘堂の中に秋葉常夜灯が設置されている。常夜灯には「秋葉山」と刻まれ，安永２年（１７７３）の建立である。施主名は削られて不明である。

１７　雲立の楠（くもたちのくす）

浜松八幡宮内にある楠の巨樹である。地上１．５ｍの幹回り約１３ｍ，根元回り約１４ｍ，枝張り東西約２１ｍ，南北２３ｍ，樹高約１５ｍあり，幹の下部には大きな空洞がある。県指定天然記念物。

永承６年（１０５１）八幡太郎義家が参拝の折，樹下に旗を立てたとの伝承から「御旗楠」と呼ばれた。また，元亀３年（１５７２）徳川家康が三方原合戦に敗れ，武田軍に追われてこの楠の洞穴に潜み，その時瑞雲が立ち上がったとの故事により「雲立の楠」と呼ばれるようになった。

「曳駒拾遺」には，三方原合戦の前，家康がこの神社に祈願したところ瑞雲が立ち昇ったという伝説が記されている。

１８　松島十湖の句碑

浜松八幡宮境内にある。「はま松は出世城なり初松魚　七十六翁十湖」と刻まれている。家康は三方原合戦の負け戦を肝に銘じ，二度と失敗を繰り返さず天下人となった。彼の若さと強靭さを新鮮な初鰹に象徴させて歌った句である。十湖は本名吉兵，豊田郡中善地村（今の東区豊西町）の生まれの俳人。全国に多くの門人を数える。報徳運動家・政治家でもある。

１９　椿姫観音

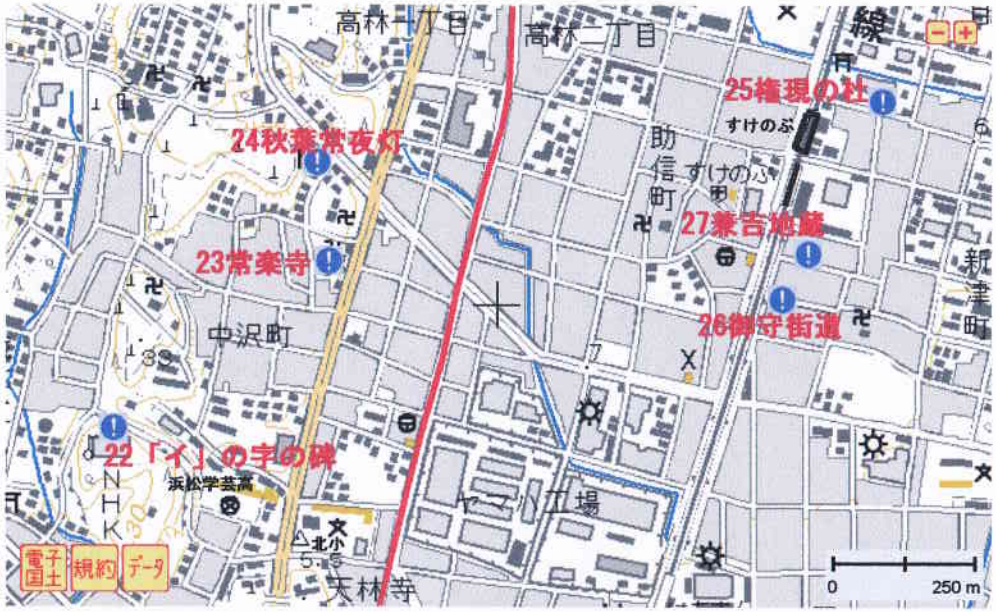
引馬城城主飯尾豊前守連龍が今川氏真に背信を疑われ暗殺された後，妻お田鶴の方が女城主となったが，永禄１１年（１５６８）家康に滅ぼされた。そのお田鶴の方の霊を祀っている。

２０　池龍様

秋葉街道より天林寺の坂道を上がった左手にあり，正しくは「池霊龍王尊」という。昔，当地に原因不明のはやり病が発生し，次々と死者がでた。ある日井戸掘りを仕事とする渥美某という人の枕辺に水神が現れ，龍神を祀るようお告げがあった。人々は力を合わせ祠を建て龍神を祀ったところ，たちどころに病魔は退散した。その後御利益にあやかろうと，人々が遠方からも訪れるようになり，祭典もにぎわった。今は甘酒の振る舞いや投げ餅が残るのみで，毎年１日と１５日に供物をあげている。

２１　正岡子規の句碑

天林寺大梵鐘の脇の築山にある。「馬通る三方が原や時鳥　子規」と刻まれている。明治２８年に松山から上京の折，浜松の地で詠んだと思われる。元は三方原の街道に建てられていたが，道路拡張のためここに移された。



山下町の秋葉街道を北に向かい，天林寺の東側をぬけると，新道と合流する。

２２　「イ」の字の碑

浜松は日本のテレビジョン発祥の地である。静岡大学工学部の前身，浜松高等工業学校において大正１３年以来高柳健次郎を中心として全電気的テレビジョン方式の困難な研究が重ねられていたが，昭和１０年蓄積方式撮像管が完成し，テレビジョンの発展の基礎が確立するに至った。「イ」の字は昭和２年の実験によって受像された映像を表している。

２３　常楽寺

高野山真言宗常楽寺の開創は天平６年（７３４）で，度々の兵火にあい，享保年間に再興された。「遠江国風土記伝」や「曳駒拾遺」によれば，元亀３年（１５７２）三方ヶ原合戦の折，武田軍が寺内に乱入，本尊の阿弥陀仏の木像を奪い，溝に渡し橋とした。現存の阿弥陀仏は，元禄３年（１６９０）の作である。（**31　阿弥陀橋**参照）

２４　秋葉山常夜灯

中沢町の村社八幡宮境内にある。正面に「秋葉山常夜燈」，裏面に「天明四甲辰九月吉日」（１７８４）と刻まれているが，消えかけている。もとは中沢の人々によって常楽寺境内に建てられていたが現在地に移された。火袋と擬宝珠は復元されている。

２５　権現の杜（もり）

富士神社の境内にある。天徳４年（９６０），京藤原氏の流れをくむ内藤氏がこの地に移り住み，志津摩信国の代に内紛が起こった。嫡男志津三郎を守る家臣が三郎を松木立に隠し，伊勢の大御神に危うきを守ってほしいと願うと，奇跡が松木立に起こり，神が蛇に化身し，松の枝に頭をもたげ，柿の実を吹き出したと言う。権現の杜と呼ばれる由来は，三郎を守るため，神が姿を変えて仮にこの世に現れたことからであるという。

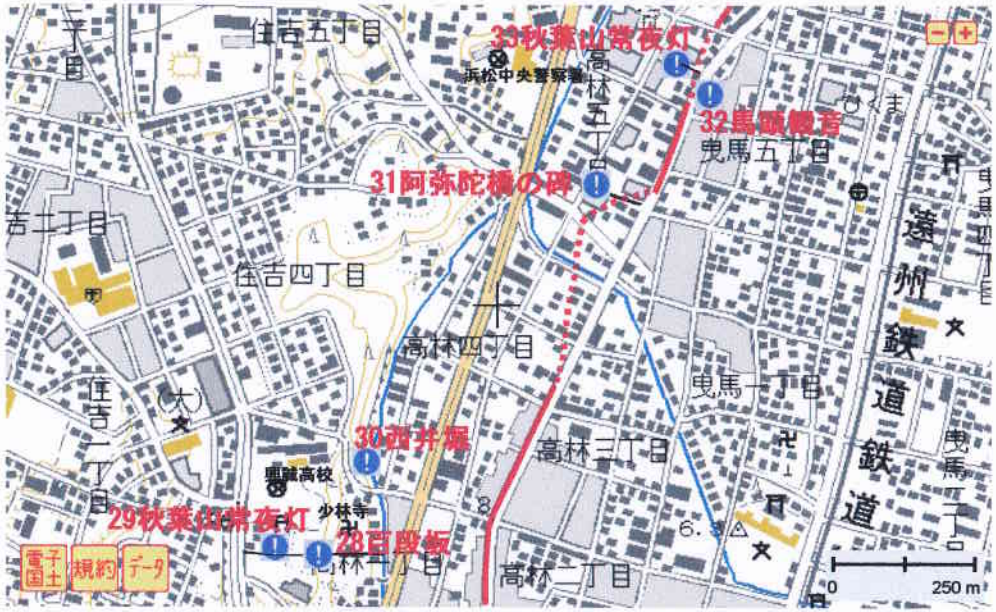
２６　御守街道

寿永２年（１１８３）志津三郎が６歳の時，内藤家の内紛が終結した。伊勢の大御神の厚きご加護に報いるため，太い御柱を建て，神明の大宮所を造営した。建長６年（１２５４）伊勢から御霊をこの志津の郷に移した。権現の杜からこの大宮所への道筋は，志津三郎を守ってほしいと願った故事により，御守街道と言われている。

２７　兼吉（かねよし）地蔵

南北朝の時代に生きた志津三郎兼吉は，鎌倉時代に刀聖と言われた正宗の高弟志津三郎兼氏の子孫と言われている。戦乱の終わったある年，兼吉が関東から京都に上る途中，浜松で病となり，ある農家で亡くなったため，人々が地蔵尊を祀り，菩提を弔った。兼吉は刀工であったが，鍬や鎌など農具も造り，切れ味がすばらしく遠近を問わず農具や刃物を買い求める人が多かった。その後，兼吉の死を悼み，農具や刃物を買い求めた人たちは，必ずこのお地蔵様にお参りする風習が起こったと言われている。

境内には「史跡志津三郎兼吉墓従是東約半町」の碑がある。



２８　百段坂

少林寺前から台地の白山神社へ一直線にのびる石段がある。通称「高林の百段坂」と言われる。登り切った台地上に石碑があり，約９０人の寄付者の名前と浄財の高が刻まれている。石段の建設は明治４２年である。白山神社は高林と住吉の産土神として崇敬を集めた。

２９　秋葉山常夜灯

白山神社拝殿の西側に破損した柱部分が安置されている。正面に「秋葉山」，左面に「永代常夜燈」，右面に「安永四乙未年」と刻まれているが，月は不明である。元は秋葉街道沿いの高林村に建てられていた。（1775）

また，少林寺前に昭和２７年に再建された常夜灯がある。柱の正面に「祈安全常夜燈」と記され，台座には「區内安全」と刻まれている。再建前は秋葉山常夜灯として建てられていたものと思われる。

３０　西井堀

江戸時代，村人は毛見（作物の取れ高を調べること）の役人を中沢町との境まで出迎えに行った。奉行は少林寺に寄って休憩し，その間，配下の役人は庄屋たちと実地検査を行った。その年のできを調べ，奉行と庄屋とで年貢米の量を決定した。決定はこの西井堀の上で行われた。奉行を接待する住職は，奉行と話のできる識者でないと務まらなかった。

西井堀は高林一～四丁目に今も浄化用水路として残っている。

秋葉街道は，高林三・四丁目の中間辺りから新道をはずれ，斜め左に向かい，五丁目の浜松米穀会社辺りで右に曲がって，また新道と合流する。

３１　阿弥陀橋の跡碑

浜松米穀会社の西北の四つ角に碑がある。阿弥陀橋は四つ角より東に５０ｍの秋葉街道にあった。碑の裏面に由来によると，三方原合戦で敗れた徳川軍が小川に来ると，橋が焼かれていた。そこで家康の家臣が中沢の常楽寺の仏像を持ってきて，川に沈め橋の代わりにして難を逃れた。その後，仏像を寺に返したが，仏像の背中に馬のひづめが残っていたという。後に家康はこの地を「阿弥陀」と名付けた。（**２３常楽寺参照**）

３２　馬頭観音

曳馬五丁目の街道沿いのお堂に，同地の小粥家の供養塔らしき石碑と共に，三面六臂（６つの肘）の馬頭観音と丸石に「八大龍王」と刻まれた碑がある。馬頭観音は馬の守護神として，八大龍王は水の神，雨乞いの神として祀られている。近くの馬込川とも関係あるのかもしれない。

馬頭観音の南辺りから，新道は少し右にカーブするが，秋葉街道は真っ直ぐに進んでいる。そして阿弥陀八幡宮前を通って，星野畳工業所の西にある昔のまま残っている細道に入っていく。

３３　秋葉山常夜灯

阿弥陀八幡宮境内に安置されているが，もと秋葉街道沿いの八幡宮前に建てられていた。正面に「秋葉山」，裏面に「文化十癸酉年六月吉日」（１８１３）と刻まれている。火袋の正面に「∴」，左側は日，右側は月の模様が彫られている。一部を除けばほとんど損傷がない。

阿弥陀八幡宮前の秋葉街道は現存しないので新道を進む。曳馬西交差点の星野畳工業所の西にある昔のままの細道が秋葉街道である。１２０m程進むと新道に出るが，そのまま新道を横切って東の道に入り，左折して清水銀行前から再び新道と合流する。

星野畳工業所の西から

細道の秋葉街道へ

林宅前を通る

新道を横切って東の道へ

左折し，清水銀行前から新道へ

林氏宅の道標

太田氏宅の道標

３４　道標

秋葉街道近くの２軒宅に３０～４０ｃｍの自然石の道標が保存されている。林令子氏宅の道標は，正面に「右ハ浜松江」，右面に「犬居秋葉山」と刻まれている。もと同宅前の街道の反対側にあったという。太田滋氏宅の道標は，正面に「右ハ濱松みち」と刻まれている。新道を横切って進み，左折する角にあったという。昔は畑だったという。

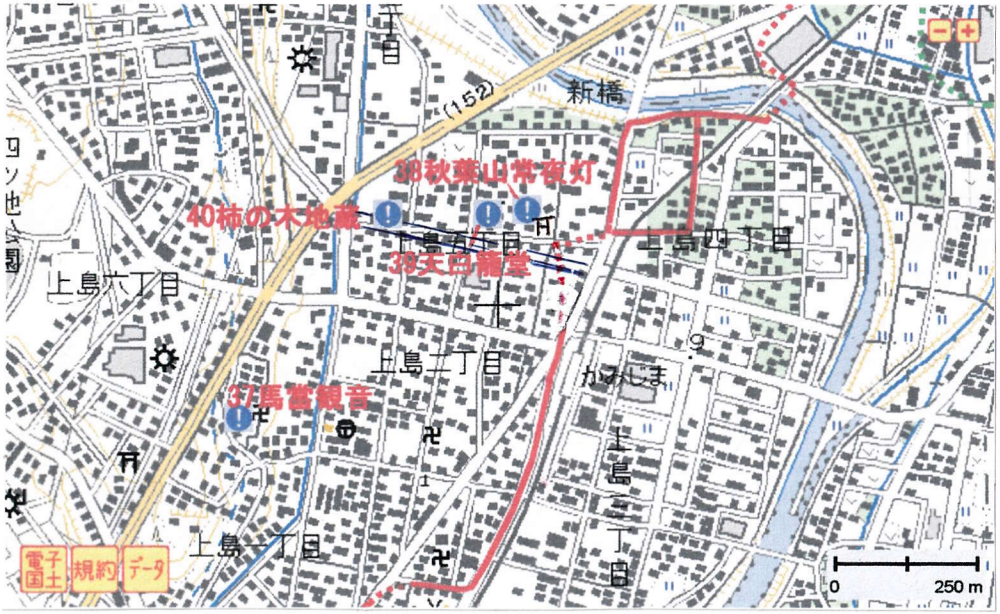
３５　秋葉山常夜灯

馬込川のほとり，十軒橋の西に建てられている。西３０ｍから移転された。正面に「秋葉山常夜燈」，右面に「寛政十二庚申正月吉日」（１８００），左面に「燈籠施主當所若者」と刻まれている。

３６　太藺（ふとい）栽培発祥の地

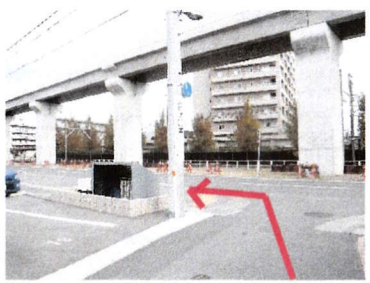
遠州地方の太藺は，臨川寺の住職が天文年間（1532~）に西の方から持ち帰って栽培を始めたという。今から１５０年ほど前の天保年間 には十軒新田村と呼ばれた当地に太藺が盛んに栽培されていた。この太藺を製織したが備後の畳表より安いことで需要が多かった。この太藺筵を村内の忠兵衛という人が中泉陣屋より注文を受け，出荷したことが太藺筵の販売の始まりであったと伝えられている。

秋葉街道は，京田バス停の北辺りから右に曲がり，電車沿いの道を北に向かう。



秋葉街道は，京田バス停の北辺りから右に曲がり，電車通りを北に進み上島駅前へ向かう。

京田バス停の北を右へ



電車通りを左折

３７　馬當観世音

正福寺の墓地の西はずれに石塔がある。「妙法馬當観世音」「天保六未七月日」（１８３５）と刻まれている。また，石塔より左手の角に森川吉兵が昭和４年に建てた馬頭観音がある。

秋葉街道は，上島駅前から斜め左手の細い道に入り，高貴神社にほぼ真っ直ぐに向かっていたが、宅地開発のため無くなった。新しい道路に廻って神社に向かう。上島駅北交差点を左折して進むと、高貴神社がある。

３８　秋葉山常夜灯

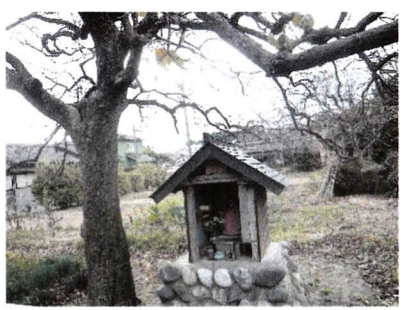
高貴神社に２基の秋葉山常夜灯がある。１つは鞘堂に安置されている。「秋葉山」「于皆 天明四甲辰正月吉日」（１７８４）と刻まれている。（于皆は于時（ときに）の異体字）もう１つは鞘堂の脇に，柱と土台のみが置かれている。「秋葉山」「村中安全」「弘化四年未秋立」（１８４７）と刻まれている。２基とも元は秋葉街道沿いの上島村に建てられていた。

３９　天白籠（こもりどう）堂

天白社の「修理固成」の碑によると，坂上田村麻呂将軍が東征した時，磐田海を渡れないでいると天白大神が示現した。

将軍が授けられた治水の珠を投じると，奔流静まり渡行できたという。万事何事もかなえられる天白大神と崇敬され，遠州一円から多くの信仰者を集め，にぎわいを見せたが，大晦日深夜の祭りでは徹夜することが多く厳寒雨雪は参詣者を困苦せしめた。村人たちは東奔西走して浄財を仰ぎ，明治３９年ようやく遠来者用の籠堂（仮眠所８畳８室）が建てられた。現在公会堂として使われている。

＊平成２４年に新しい公会堂に建て替えられた。



４０　柿の木地蔵

この地方の開拓時に土中より石仏の破片と思われる石の塊が数多く出土した。農民は近くの柿の木の下に石を集め祭祀したのが始まりと言われている。明治初期に付近の地主の曾祖母の夢枕の地蔵尊示現により祭祀せよとのお告げがあり，地蔵尊を安置するとともに白布に御詠歌を書き添えて供養した。

４１　道標

高貴神社東の角に道標が建てられている。正面に「二俣秋葉道」，右面に「左濱松□近道　右細道飛行場右本通渡□道」，左面に「御大典記念　曳馬村青年団　上嶋□□部」と刻まれている。昭和３年昭和天皇即位の御大典記念による建立である。今の場所から１ｋｍほど南の街道にあったという。

また，高貴神社のこの角の十数ｍ北に馬頭観音らしき石仏や石塔がある。

秋葉街道は，高貴神社の角から東に進み，新道を横切り，踏切を渡って上島東会館の手前の角を北に進み，馬込川前を東に進んで広瀬橋跡へ至る。別に新道と同じ道を北に進み，馬込川前を東に進んで広瀬橋に至る道もあったようだ。

新道を横切って踏切へ

会館手前の角を北へ

４２　北向き地蔵

上島東会館の前に地蔵堂がある。六角形の台座の上に地蔵菩薩の座像があり，台座には由来が漢文で刻まれている。米沢生まれの直応は妻子と死別したことから世の無情を感じ，全国各地の寺社巡りの途次，上島村の小庵に寄遇，このとき感ずるものがあり，人々の浄財を得てこの地蔵を建立した。銘文は徳正寺の泰崇和尚によるもの。寛延４年（１７５１）９月と記す。

隣には宝暦３年（１７５３）建立の童女地蔵がある。また，以前は，会館の角に，高貴神社に移された秋葉常夜灯があった。

４３　広瀬橋跡

秋葉街道はここで馬込川を渡った。電車線鉄橋の３０ｍほど下流である。「旅篭町平右衛門記録」によると，「上島村，此村之はつれ川有，歩行渡り」「有玉川歩行渡，人皆難澁ニ付，安永年中（１７７２～１７８１）より板橋かけ渡る」とある。有玉川は馬込川のことで，橋は「広瀬の板橋」と呼ばれていた。板橋は昭和３３年ごろの大水の際，落ちてしまった。

４４　主従地蔵

馬込川を渡った堤防脇に地蔵堂がある。江原地蔵尊と呼ばれている。昭和３２年建立の石碑には「主従地蔵尊由来　主藤原景時　従伊藤守政　天保二年六月廿五日小池ト上島地境ノ此ノ地ニ没ス」と刻まれている。遠国からはるばるこの地にやってきた主従二人が疲れのためこの地で生涯を終えた。主従が共にいたわりながらこの里で死んでいったのを見た村人が，供養のために建てたものだという。別の由来の説明文には，三方原合戦の時傷ついた武士とその家来亡くなったため供養したと書かれている。　＊最近新しい地蔵に取り替えられた。

秋葉街道は，馬込川を渡った後，電車線を越えてスーパーマーケットと駐車場を横切っていて現存しない。そして新道から市場橋を渡ってすぐ左手の細道に入る。細道をぬけると，姫街道と合流する。右に折れて東へ３０ｍほど進み，分岐点に至る。

スーパーから新道へ

市場橋を渡って左折

姫街道と合流，東へ

４５　道標

分岐点の道南（右手）に建てられている。正面に「左あきはみち」，右面に「天明六年」（１７８６）と刻まれ，上部の文字が欠損し，下部の文字は土に埋もれている。

秋葉街道はここから北の細道を進む。

四里廿六丁

四里廿四町

４６　半僧坊里程石

姫街道沿いの有玉村に奥山半僧坊への里程石がいくつか残されている。石材や文字の記入方法が共通しているものが多く，同時期の明治１９年頃の建立である。

四里廿壱丁

四里廿丁

四里十九町

秋葉街道は，姫街道との分岐点から北の細道に進み，細道から新道を横切って，２０ｍほど着物店の建物横まで進む。ここからは北へ向かい，東名高速道路のガード横を突っ切っていくが現存していない。

秋葉街道は，東名高速道路を突っ切り新道より斜め左を北へ向かうが，残存していない。そして民家前の道を東に向かい，すぐに新道と合流して北へ向かう。

斜め左に北へ

民家前を東へ，すぐ新道を北へ

信号を渡ると，新道の左側が広くなっているのは，秋葉街道の残存部である。

４７　有賀豊秋の墓と歌碑

元秋葉街道西近くの墓地に有ったが，最近正光寺霊園の南西角に移された。墓標には明治十三年の岡部譲の書で「有賀豊秋大人之墓」と刻まれる。横には松島十湖の書で「佐保姫の霞のころも立かへりけさより春とあらたまりけり」と刻まれる歌碑がある。豊秋は寛政（みちあき）２年（１７９０）有玉幡屋村に生まれる。高林方 朗（みちあき）の門人として知られ，本居大平の門に入る。国学研究に情熱を燃やし，遠州報国隊の結成に大きな力をなした。皇学，歌道，さらには俳諧の世界にも才を発揮，このため門人も多かった。

４８　秋葉山常夜灯

有玉神社の前に建てられ，正面の柱に「秋葉山」，土台に「邨中安全」，裏面の柱に「天保十三壬寅年三月」（１８４２）と刻まれている。高さ３３０ｃｍで巨大である。火袋は造り替えられたためか，灯明の用をなしていず，祈願のための常夜灯となっている。

４９　有玉神社

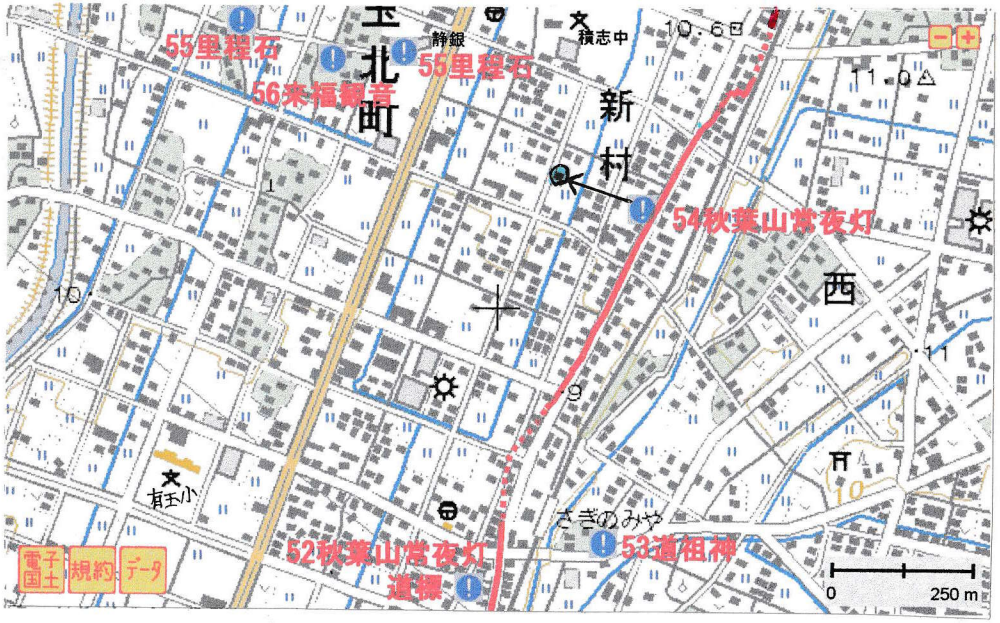
明治４０年郷社神明宮を村社八幡宮境内に移し，俊光将軍社など１１社を合祀して郷社有玉神社とした。有玉神社には，400年前家康が愛馬を寄進したことに始まるといわれる流鏑馬神事が行われる。伝説では，坂上田村麻呂が東征の折，舟岡山に陣を置いた。そこで大蛇の化身である美女との間に子（俊光将軍）をもうけたが，大蛇は正体を見られたため子供と玉を残して海へもどった。後に田村麻呂と俊光将軍が蝦夷征伐に向かう際に，袖ヶ浦（天竜川）が荒れていたので玉を投げ入れたところ，潮が引いて陸となったという。玉を投げ入れた地に建てられたのが有玉村八幡社である。

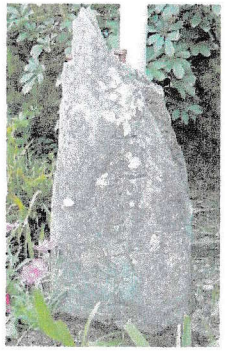
５０　高林家の長屋門

高林家は，近世を通じて浜松藩（はまつはん）の大庄屋（独礼庄屋）を務めた。８代目方 朗（みちあき）は賀茂真淵門下の内山真龍に国学をうけ，本居宣長に入門した。遠江国学者の一人として多数の同志と深い交わりを結んだ。歌集詠草，日記，考証などの著述が多くある。１４代目兵衛は民芸運動に参加し，邸内に民芸運動の拠点として「日本民芸美術館」を開いた。屋敷入口に江戸期の長屋門が建つ。享和３年（１８０３）方朗によって建てられた。

５１　西国巡礼供養塔

川原本村公会堂北側の墓地（慈光院跡）にある。正面に「（種子）奉納西国三十三所順礼観音為二世安楽」，右面に「遠州長上郡美薗懸有玉之内幡屋村下村」，左面に「于時元禄六癸酉歳弐月吉祥烏敬白」（１６９３），裏面に慈光院ほか１７名の同行者の名前が刻まれている。観音霊場の「三十三」は観音菩薩が三十三身に応現して衆生を救うという観音経に由来している。





５２　秋葉山常夜灯と道標

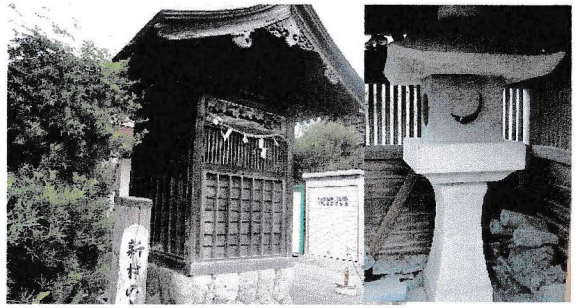
有玉南町東畑屋の公会堂の東５０ｍの角にある。柱の正面に「秋葉山」，右面に「永代常夜燈」，左面に「有玉畑屋本村中」，裏面に「明和八辛卯年六月吉日」（１７７１）と刻まれている。土台と火袋以外は御影石で当時のものである。元は大瀬橋西の街道西側に建てられていた。

常夜灯のすぐ脇に道標がある。自然石の正面に「左あきはみち」，左側面に「六ヶ郷安全　願主周音」と刻まれている。元秋葉街道沿いにあった。

西畑屋の公会堂の北にも秋葉常夜灯が２基（寛政４年，文化５年，元秋葉街道沿い）あったが，取り壊された。

５３　道祖神

狢（むじな）川の大瀬橋東１００ｍの道ばたにある。建立年月は不明。道祖神は塞（さい）の神と呼ばれ，外部から敵や疫病から村人を守る神と信じられ，村の境などに祀られている。男女二神が並び立つもの，睦み合うものなど，いろいろである。



５４　秋葉山常夜灯

新村の公会堂前の鞘堂（龍燈）に秋葉常夜灯が建てられている。正面に「秋葉山夜燈」，右面に「明和元申六月廿八日」（１７６４），左面に「有玉新村郷中」と刻まれている。この地域では最も古い。鞘堂は明治４２年に建てられている。

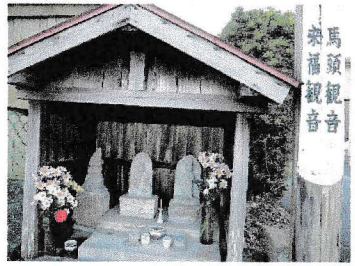
＊現在、公会堂と共に200ｍ程西方に移転。

四里廿丁

四里廿壱丁

５５　半僧坊里程石

有玉北町に２つの里程石がある。静岡銀行有玉支店の南の半僧坊道を西へ５０ｍの所に「四里廿丁」の里程石，さらに西へ行くと黒田家の東側 に「四里廿壱丁」の里程石がある。いずれも明治十八年建立である。この半僧坊道は天竜川西岸の豊西から半田を通って，東三方町の「赤松の鳥居」に至り，三方原を東西にぬけていく道筋である。



５６　来福観音と馬頭観音

来福観音は，昔の宝珠庵跡に開校した積志第二分教場の跡地を大正５年頃に整地したとき，観音様を発見して地元の人がここに祀った。参拝者に福が来るということで，来福観音と名付けられた。光背に道しるべが刻まれている。馬頭観音はもとはある農家の門先にあった。今も地元の人たちによって３月に供養が行われている。

秋葉街道は，新村の秋葉山常夜灯から２００ｍほど北へ向かい，右手の理髪店前の細い道を進み，突き当たりの積志保育園で右折，そして左折して共同墓地に至るところで途切れている。保育園の前のお堂に弘法大師像が祀られている。保育園の場所にはもと寺院があった。

迂回路は戻って新道を進む。

理髪店前から右手の細道を進み、積志保育園に突き当たる所にあるお堂に，弘法大師像が安置されている。

５７　龍秀院

寺伝によると，大永元年（１５２１）機堂宗鑑和尚が，可睡斎九世潜竜慧湛和尚を開山に勧請，自らは二世となった。現本堂は元禄１１年（１６９８）以前に建てられ，一本のツガの木を四ツ割にして柱としたり，廊下を鶯張りとした。開創以来一度も火災に遭っていない希有の存在とみられ，古文書も多数無庇で残っている。二世機堂和尚が着用したという法衣が伝えられ，また，吃又が描いたとされる一曲二双の大金屏風がある。

迂回した新道の積志小前交差点を北に進み，右手の丸美屋靴店の角から右に折れて進む。すぐ左折して北に向かう細道が秋葉街道である。しばらく進むと左に曲がって新道と合流する。

５８　子安地蔵と臥竜の松

積志町の東光寺山門脇のお堂に石像の延命地蔵菩薩が祀られている。この地蔵は１３世古関智鏡禅師によって造立された。蓮華座に高さ約８５ｃｍの堂々とした姿である。台座は六角型で，文化５年（１８０８）造立の由来と有縁の信者の戒名が刻まれている。この地蔵は「子安地蔵尊」と呼ばれ，７月２４日に供養祭が行われ，地元の信仰を集めている。

また，東光寺境内に，樹齢２００年余り，幹長は約２２ｍにも達する松があり，その横這いの景観は見事である。

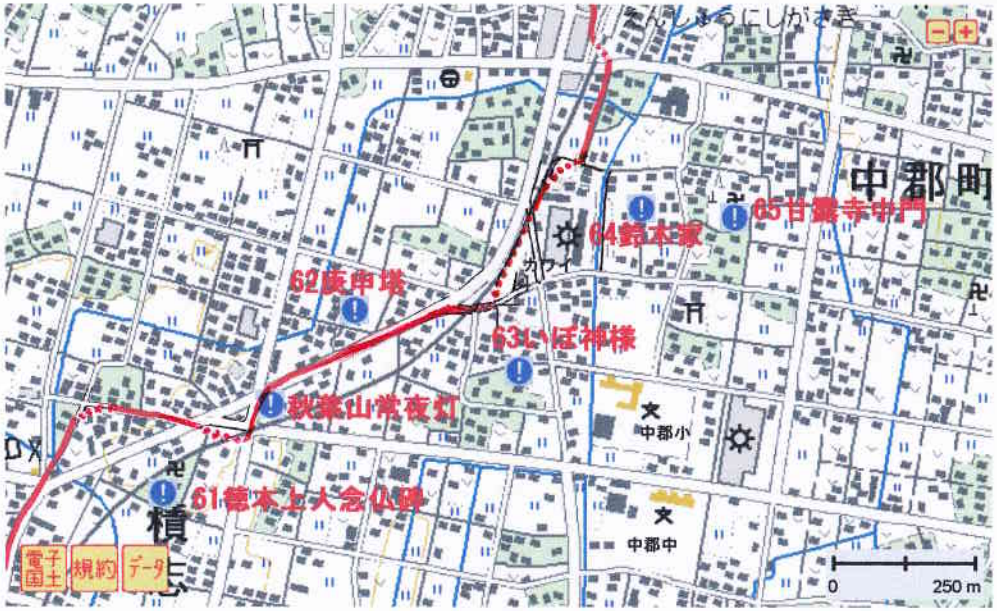
５９　秋葉山常夜灯

積志町漆島の神明神社の境内西側に建てられている。正面に「常夜燈」，右面に「秋葉山」，左面に「漆嶋村中」，裏面に「寛政七乙卯龍舎五月吉日」（１７９５）と刻まれている。

６０　秋葉山常夜灯

積志町吾妻の吾妻神社境内の鞘堂（龍燈）の中に建てられている。積志地区で２番目に古い。正面に「秋葉山」，右面に「明和四年丁亥霜月吉日」（１７６７），左面に「講中」と刻まれている。火袋受けには，秋葉山の象徴である剣花菱の紋章が彫られている。火袋は花崗岩で後補した形跡がある。もと秋葉街道沿いに建てられていた。

新道を北に進むと，右手にカーブするが，秋葉街道はヘアサロンの左手を斜めに進み，すぐ右手の橋を渡り進む。そして最初の角を右折し進むと，新道に出る。



新道を横切り斜め右へ

踏切手前を左折

新道を右折

その角に秋葉山常夜灯

６１　徳本上人の念仏碑

積志町の西伝寺境内にある。元秋葉街道沿いにあった。碑には「南無阿弥陀仏　徳本（花押）文政元寅年十月六日」（１８１８）と刻まれている。徳本上人は浄土宗の高僧で，ひたすら「南無阿弥陀仏」を唱えて日本各地を行脚し，庶民の苦難を救った。念仏中興の祖といわれている。

６２　庚申塔

積志町橋爪西の墓地にある八角柱の笠塔碑である。正面に青面金剛像と三猿，他の各面にも仏像の浮き彫りがある。右面下に「遠州長上郡」，左面下に「橋爪□　享保七年霜月吉□」（１７２２）と刻まれている。昭和３０年頃まで庚申講のとき，講全員で庚申塔に五穀豊穣と家内安全を祈願し，当番の家で会食をしたという。

踏切に向かい越える

北側の踏切から

秋葉街道は，新道から斜め右に入り踏切を越える。すぐに左折し線路に沿って北側の踏切まで行くが，その道は現存しない。北側の踏切の先は線路に沿って一部道が残されている。

６３　いぼ神様

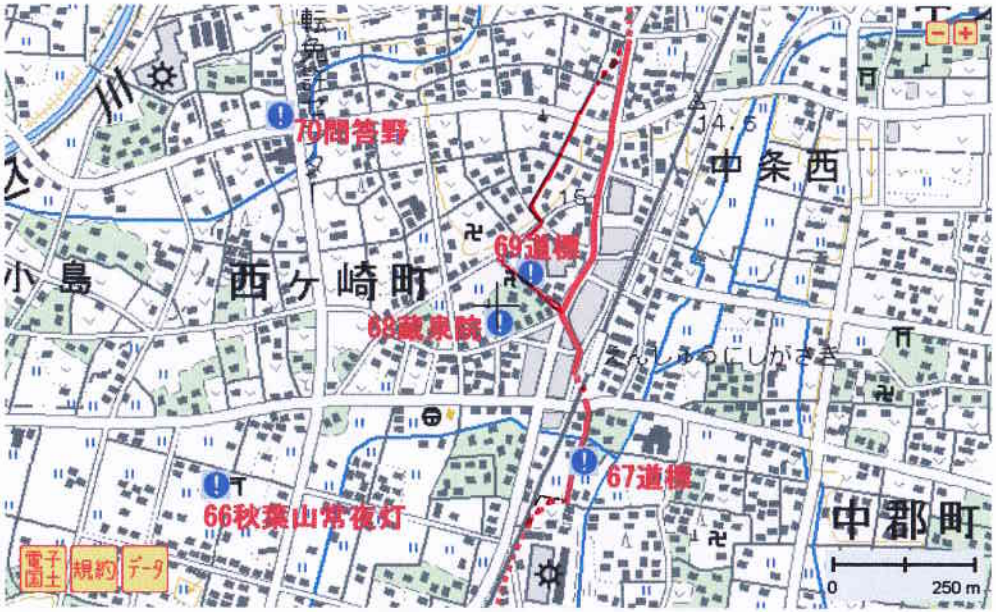
昔，この村にいぼがたくさんできた六部がやってきた。他の村の人たちはこの六部を泊めようとしなかったが，この村の人たちは親切に泊めてやった。六部が村を去るとき，お礼のしるしに「うつぎ」の木を植えていった。以来，この「うつぎ」に触ると，どんないぼでも取れると言い伝えられ，治癒した人は「もみがら」を袋に入れて供える習わしとなっている。

６４　鈴木権右衛門家

江戸時代浜松藩における古独礼庄屋の四家の中で最も高い格式を持っていた。万斛村と周辺の村々で組織された万斛組の代官的役割を果たした。有玉下村の高林家など，名家名流と親縁関係を結んでいる。家康の愛妾「阿茶局」が預けられ，家康が鷹狩りの帰りなどに立ち寄り，彼女を寵愛したという。屋敷門は総けやき造りで重厚であるが，現在は木々で覆われてしまっている。現在，市により公園化が計画されている。

６５　甘露寺中門

臨済宗方広寺派の名刹で釈迦牟尼仏を本尊としている。縁起によると弘仁年間（８１０～８２３年）に弘法大師によって開創されたといわれ，往時は真言宗の大寺であった。明徳元年（１３９０）には臨済宗となり，応仁の乱で全焼，元治元年（１８６４）には，中門と楼門を残し焼失した。中門には，古式の様相と技法が残され，斗組（ますぐみ），懸魚（けぎょ），左右の支柱等に特色を有し，簡素なうちにも力強さが感じられる。浜松市の指定文化財である。家康が庭前の古梅を「未開紅甘露梅」と名付けて観梅したという。また，国学者賀茂真淵が観梅の歌会を開いている。



６６　秋葉山常夜灯

西ヶ崎八幡宮境内に折れた柱等が放置されている。柱の正面に「秋葉山」，左面に「郷中」，裏面に「明和七庚寅十一月吉日」（１７７０）と刻まれている。もと秋葉街道沿いに建てられていた。笠や火袋は失われている。

６７　道標

秋葉街道沿いに建てられ，左右が田や畑で往時の面影を残している。自然石に「左あきはみち」と刻まれている。建造月日は明記されていないが，江戸時代のものであると考えられている。高さ８０ｃｍである。

秋葉街道は，道標から北へ向かい，環状線に出る。西ヶ崎駅構内を進み，駅前を斜め西に通る細道を進み，新道と合流する。

６８　蔵泉院の正覚坊大権現と六地蔵

蔵泉院の鎮守となっている正覚坊大権現は海の守り神であり，正覚坊とは大海亀の称である。天竜川や馬込川の洪水に悩まされた住民が，水難を避けるため勧進したものとみられる。同大権現に対して海岸で漁をする人たちが信仰を深め，参拝に来る人も少なくないそうである。

また，地蔵堂の六地蔵の中に，「ろくさい十二人　西ヶ崎村」や「元禄十六年癸未八月吉日」（１７０３）と刻まれたものがある。六斎信仰者が地蔵に救済を願って建てたものと思われる。六斎とは，毎月の８日，１４日，１５日，２３日，２９日，３０日の六日を斎日（さいにち）と称して，在家はこの一日一夜を斎戒謹慎する信仰である。

蔵泉院の前は半僧坊道である。また，昭和１２年建立の秋葉山常夜灯がある。

６９　道標

平口の瀑布山不動寺は昔から厄除け不動として広く世に親しまれていた。この不動道にある道標には，正面に「左ひらくち右かさい」，左面に「西ヶ崎村」と刻まれ，下部は埋没している。

また，すぐ隣の公会堂前には，西ヶ崎駅南のＪＡ前の交差点角にあった道標が移されて建てられている。表に「左笠井行」，裏に寄付人名や金額が刻まれている。

７０　問答野（もんどの）

東区西ヶ崎町と浜北区小松との境になっている所を「問答野」とよんでいる。ここは昔から戸数が少ない上に石高が多かったので，付近の土地所有者が，小松では西ヶ崎に，西ヶ崎では小松に所有させて互いに高い租税を免れようと，言い争いが絶えなかった。結局，両村から僧侶が出て，問答をして負けた方がその土地を所有することにしたと言われている。

秋葉街道は，新道の小松南一丁目交差点の手前１００ｍの所で，斜め右の細道に入る。細道をぬけると，街道は残存せず，住宅地を北に向かって，小松の鳥居手前で新道に出ている。

７１　秋葉山常夜灯

中条西の安楽寺前の龍燈内に建てられている。柱の正面に「秋葉山常夜燈」，左面に「安政四巳四月建立　中条　西海道　殿海道　本村」（１８５７）と刻まれている。１月２８日に祭典をし，投げ餅をしている。

７２　秋葉山常夜灯

中条北の火の見櫓横に建てられている大きな常夜灯である。笠に剣花菱の紋章がある。「秋葉山」「常夜燈」「區内安全」「大正七年五月」と刻まれている。１月１５日に祭典をし，投げ餅をしている。

７３　秋葉大鳥居・秋葉山常夜灯・道標

小松の**鳥居**は，浜松田町にあった「一の鳥居」に対し「二の鳥居」といわれ，秋葉山参詣者の大きな目印となった。高さ７．３ｍ，柱間６ｍ，柱回り２．１ｍ，花崗岩造りで，文政５年（１８２２）三河岡崎の石工によって建てられた。安政元年（１８５４）の地震で倒れたが，再建された。鳥居の石製額に「正一位秋葉神社」，右側の柱に「文政五年壬午五月建之」と刻まれている。

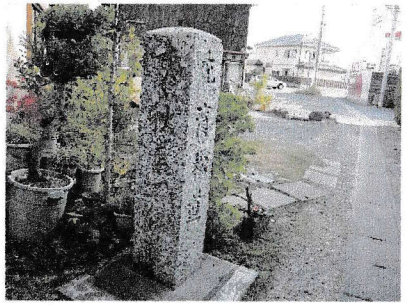
秋葉山常夜灯が鳥居の前の龍燈の中に建てられている。柱の正面に「永代常夜燈」，左面に「明和五戊子六月吉日」（１７６８），右面に道標を兼ねて「右あきはみち」，裏面に「願主小松村中」と刻まれている。設置の仕方が逆になっている。火袋には明かりを灯した跡が見える。龍燈の欄間には彫刻が彫られている。龍燈は秋葉山常夜灯を保護する鞘堂であり，竹村広蔭の「変化抄」によると，文政の頃から雨覆のために造られるようになったという。（大鳥居と共に市指定文化財）

また，鳥居前に明治１７年建立の**道標**がある。正面には「右　秋葉三尺坊　左　奥山半僧坊　道」と刻まれている。元は西側の分岐点の角にあったという。

７４　道標

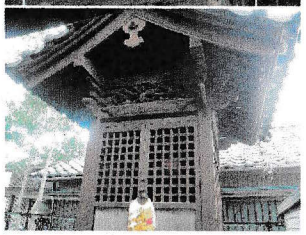
十八屋横の交差点，西北に建てられている。自然石で正面に「右　みやぐち　あたご　左　ふどう　おくやま　かなさしきが道」，裏面に２名の協同建立者の生まれ年や年齢，「明治□十一年二月」の文字が刻まれている。また，十八屋交差点から西の三叉路の角に「右　奥山半僧道　四里三十壱丁　左　有玉　半田道」，右面に「明治十七年五月建之」，左面に「袴田唯吉」ら３名の氏名が刻まれている。

秋葉街道は，鳥居の右側の細道を進む。ここから「なゆた浜北」の手前で新道と合流するまで，昔の面影を残している。途中，葬祭式場の所を左に折れて進む。



７５　道標

貴布祢第一町内会公民館の南に建てられている。もとすぐ近くの貴布祢南交差点の角に立てられていたものとみられる。北面に「すぐ秋葉二俣道」，西面に「左濱松道」，南面に「半僧坊不動道」，東面に「明治十六年三月建之　下川原中　濱松□□」と刻まれているが，設置の向きが逆になっている。



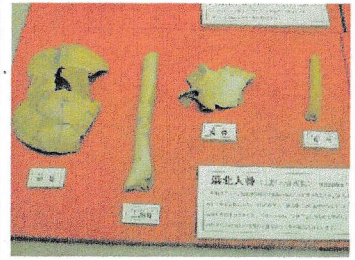
７６　日限地蔵尊

元は駅前の静岡銀行の支店ができる前，その敷地にあったものが，現在地に移された。創立年代は不明。日数を限って願をかけると願がかなうという。

昭和３０年頃には，付近の芸者・料理屋などの人々が多く参拝に来ていた。また，愛知県の半田方面からもやってきたものもあるという。毎年７月２３・２４日の大祭でお経を唱えたり，遠州大念仏が行われたりしている。

７７　代官堤

江戸時代には，このあたりには小天龍が流れており，横須賀の地名は，川の中の「すか」（砂州）から名付けられたと言われている。「代官堤」は横須賀地内を小天龍の氾濫から守るため，江戸時代につくられた堤防で，工事の責任者の代官が名前の由来と伝えられる。今ではその役割を終え，堤は壊され農地や宅地となった。堤は全長１ｋｍ，高さ２ｍ近くあり，川の流れをゆるめる蛇篭出しが設けられていたという。付近には船着き場であった「舟の内」という地名が残っている。



７８　市民ミュージアム浜北・万葉歌碑・長屋門

浜北文化センター内にあり，浜北区内の考古・歴史資料，民俗資料が展示されている。根堅遺跡から出土の浜北人骨（複製品）や赤門上古墳から出土の市内唯一の三角縁神獣鏡，遠州大念仏資料などの展示がある。

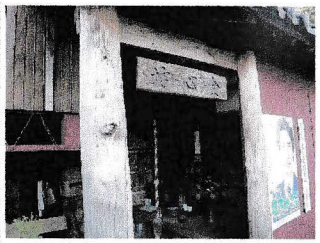
また，センターの東駐車場横に，古代の麁玉郡の人々が詠んだと思われる万葉歌の一つで，「あらたまの　伎倍の林に　汝を立てて　行きかつましじ　寝を先立たね」（作者不詳）の歌碑が建てられている。

センターのすぐ北には，江戸時代の長屋門が残る森岡の家（旧平野家）がある。

＊平成２６年、森岡の家は解体された。

７９　薬師堂・全心坊

薬師堂は薬師如来をまつる仏堂で，寛文１３年（１６７３）に建てられた。しかし，火事で焼けたので寛政８年（１７９６）に再建されたが，完成までに数年かかり擬宝珠には６年後の享和２年の銘がある。寄せ棟造りの屋根の深い軒は斗栱で支えられており，内部の天井には草花の絵が描かれている。この仏堂の大きな数珠は，多くの人たちが数珠をたぐりながら念仏を唱える百万遍念仏に使われた。



全心坊は薬師堂の横にある。昔この地に悪病がはやった時，旅の名僧が病を治め当地の繁栄を願って，この地に穴を掘って入定した。その時，自分を祀ってくれれば，世の人の福運をもたらし一生の願いを必ず叶えると言い残したという。

８０　長泉寺山門

幕末最期の浜松城主である井上河内守正直の下屋敷の門である。明治になって平野家・気賀家の共有となり，大正期に平野社団のものとなって，昭和３年平野家の菩提寺である当寺に寄贈された。屋根瓦には井上家の家紋が残されている。

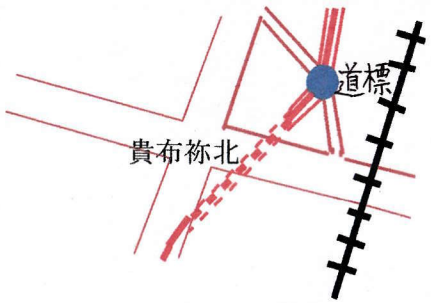
８１　秋葉山常夜灯

貴布祢第四区公民館の東にある須佐之男神社境内の龍燈の中に建てられている。もと秋葉街道沿いにあったものが，文化センター前の貴布祢神社に移され，さらに現在地に移された。柱に「永代常夜燈」「為村中安全」「明和五戊子九月吉日」（１７６８）と刻まれている。火袋には油皿がのっており，火袋受けと柱には油痕が残っている。古老の話として，菜種油を皿に入れ，「とうすみ」を２本皿の中に差し込み，明かりをともした。手箱に「とうすみ」を入れ，村中輪番で常夜灯の火をともしたという。

斜め右手へ

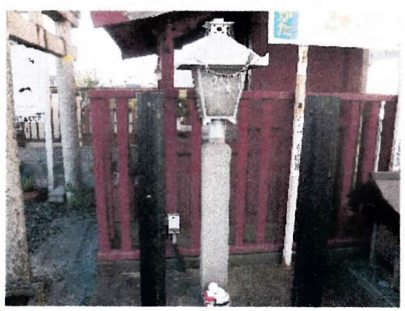
道標へ

秋葉街道は貴布祢北交差点の手前を右手斜めに進み，笠井から宮口へ至る道との交差点（道標）に至るが，途中まで残存しない。そして交差点を北に進み，美薗公園駅前に出るが，そこから北の街道は住宅地となって残存しない。



８２　道標

秋葉街道と，笠井・宮口を結ぶ交差点に観音講の人たちによって建立されたもので，江戸時代末期のものであろうと言われている。４つの面にそれぞれ文字が刻まれている。北面に「右　はま松　左　可さ井池田　道」，南面に「左　みや口大平道　観音講中」，東面に「すぐ秋葉山道」，西面に「左　秋葉山道　是より七里」と刻まれている。（市指定文化財）



８３　秋葉山常夜灯

貴布祢第七区公民館前に建てられている。笠と火袋はブリキ製，柱は花崗岩で，「秋葉山」と刻まれている。２月第１日曜日に祭典を行い，投げ餅をし，お汁粉を作る。隣にある高尾稲荷と一緒に行う。

高尾稲荷は創立年代は不明だが、貴布祢の泉屋に祀られていた。芸子など多くの人がお参りした。高尾太夫の神霊を祀ったとも言う。

８４　秋葉山常夜灯

西美薗下公会堂前にある巨大な常夜灯である。柱に「秋葉山常夜燈」「皇統無窮」「御成婚記念」「大正十三年一月」，台座に「天下泰平」と刻まれている。４月１５日に祭典を行う。

秋葉街道は，美薗中央公園駅前から北は住宅地となり残存していないが，道本交差点を越えた辺りで新道と合流する。

８５　子安堂・石松の祠

いつ頃からお堂があったかは不明だが，現在の**子安堂**は，文化１２年（１８１５）に再建され，大正１２年に茅葺きから瓦葺きに変わった。子安地蔵像などが祀られ，「地蔵堂」「閻魔堂」などとも呼ばれていた。敷地には秋葉山常夜灯も建てられており，秋葉講の人たちの休憩所に使用されるなど，地域の秋葉信仰の拠点であった。子安地蔵は安産の御利益があると言い伝えられ，毎月「十四日念仏」として祀っており，７月中旬頃に祭典を行っている。

子安堂の前に**石松の祠**がある。地元の保存会の説明板では，石松の首無し地蔵は，ここより三丁（約３００ｍ）前方にあったものが，この地に移された。石松は三河生まれで，森で過ごしたが，布橋の兼吉と寺島に住む都田の吉兵衛らによって殺された。それで里人たちによって地蔵が建てられた。この地蔵は，家内安全，商売繁盛，目耳の病に御利益があるとされ，地蔵が欠き取られ首無しとなったという。

８６　天宝堤

天竜川は昔から度々氾濫し，人々を苦しめたが，「続日本紀」によると，天平宝字５年（７６１）７月に「遠江国荒玉河堤が三百余丈（約１ｋｍ）にわたって決壊したので，延べ三十万三千七百人あまりの人夫を徴発し，食糧を与えて修築した」と書かれている。また，天宝堤は北は道本から南は有玉まで続いていたと，内山真龍の「遠江国風土記伝」に書かれている。現在は１８ｍしか残っていないが，昭和初期には長さ２５５間（約４６４ｍ），高さ４尺５寸（約１．３５ｍ）が残存していた。(市指定史跡)

８７　道標

小林駅の西の街道沿いにある。正面に「御成婚記念　東　請留　東美薗　油一色　西　新原　平口不動」と刻まれている。大正１３年のものと思われる。

秋葉街道は，小林駅前を過ぎると，右手斜めの細道に入る。電車線路を越えた辺りで左斜めに進むが，現存していない。小林郵便局の北辺りで新道と合流する。

秋葉街道は，左手のパチンコ屋に沿って斜め左の細道を進むと，用水に至る。そこから斜め右手に新道に向かって進むが，街道は残存していない。新道に合流してから北へ進む。

８８　北浜の大カヤノキ

カヤは，イチイ科の常緑樹で雌株，雄株の区別がある。毎年４月に実を結び，種子はカヤノ実と呼ばれ，食用や薬用となるほか，食用油もとれる。北浜の大カヤノキは，高さ２１．７ｍ，目の高さでの幹回り約５．３ｍ，根回り約１５ｍ，樹齢はおよそ６００年 と推定され，我が国のカヤノキの中でも有数の巨樹である。国指定天然記念物。

８９　新原の大マキ

マキは遠州地方では「ほそば（細葉）」と呼ばれ，屋敷囲いや庭園木として利用されてきた。マキは，マキ科の常緑針葉高木で毎年５月に開花し実を結ぶが，この実は遠州地方では「やんぞうこんぞう」と呼ばれ食用になる。新原の大マキは，木の高さ２２ｍ，目の高さでの幹回り約３ｍのイヌマキの雌木である。樹齢は不明。市指定天然記念物。

９０　馬頭観音

東原地区に３体の馬頭観音がある。１体は，平野晃史氏宅入口にある。８０年近く前，家の火事で焼死した馬の供養のため建てられたとのことで，昔は１０月３０日に祭りを行い，にぎわったという。今は初午の日に瑞応寺の住職に読経供養してもらっている。観音像の光背に「廿五男く□□」「宝暦十四申三月七？日」と刻まれていることとの関係は不明。

もう１体は，江間達哉氏宅の西畑にある。元は達哉氏の祖父が秋葉街道の辻に交通安全を祈願して建立したが，父親が昭和４５年に少し北の踏切に移して新しい観音を建てた。更に踏切改修工事のため，事故が多い現在地に移したとのこと。初午の日に瑞応寺の住職に読経供養してもらっている。

さらにもう１体の馬頭観音が黒川哲司氏宅前の街道沿いの踏切付近にあったが，平成２２年に鉄道高架工事のため，瑞応寺に移され，初午の日にお祭りしている。

９１　彦助堤

江戸時代の初め頃，天竜川は大天竜と小天竜とに分かれて流れていたが，小天竜はしばしば氾濫し人々を苦しめていた。延宝２年（１６７４）８月の洪水は「寅の満水」と称された大洪水であった。このため延宝３年ここに堤防をつくり，小天竜の流れを締め切って本流に合流させる工事が行われた。しかし流れが強く，工事が進まなかった。これを見た庄屋の松野彦助は，自分が人柱となるから工事を完成してほしいと頼み，川に身を投げた。その熱意に打たれた農民の努力によって堤防は完成し，この堤防を彦助堤と呼ぶようになったという伝説が残っている。

○　道標

秋葉街道と１５２号線バイパスの交差点，遠鉄西鹿島線高架の北側で街道沿いに道標がある。上下二つに割れ，左面が欠けている。上部には如意輪観音像が彫られ，正面に「右　はま々つ（変体かな）左　笠井池田　道」，左側面に「□□仏講中　十人」と刻まれている。建立年月は不明。もと交差点あたりから南東に向かう昔の道があった。

「龍燈・秋葉山常夜灯」より

９２　龍燈跡

平成１６年まで，秋葉街道沿いに重厚で優美な構造をもつ龍燈があった。総欅造りの扉と格子窓と方形・扇（２層）の屋根をもつ重厚な建物である。もとは掛塚にあった龍燈で，明治２０年頃，隣保の人たちが運んできて設置したという。創建年代は不明だが，１５０年もの歳月が経過しているものと推測するとのこと。現在は近藤内科医院の看板の所に跡が残っている。

秋葉街道は，用水を越え，大きなヒヨクヒバの木のすぐ北の細道を右折し，さらに左折して進み，線路に向かう手前で斜め左に折れて北に進む。

＊ヒヨクヒバは倒れる危険があるため最近伐採された。

ヒヨクヒバの木の北を右折

少しで左折

斜め左へ

９３　榊神社（鷲の宮）

大きな樹木の下に小さな社が祀られている。いつの頃か，一羽の白鷺が「ヒコホホデリノミコト」の神札をくわえて舞い降りたので，この神を祀り，さらに於呂神社にも祀った。於呂神社の祭りの屋台は，最初に榊神社に集まることになっている。柴本の地名も，この地区にあった他の３本の木を合わせ「四葉本」が起こりとも言われている。榊神社の木は「オガタマノキ」で「招霊の木」と書き，古は神霊を招くために使われ，「サカキの真物はオガタマノキとの説もある」という。

９４　地蔵堂

職業訓練センターの東の遊園地にある。近くにあった埋葬墓地から遺骨を収集し万霊塔に納め供養をした時，同じくここに移されたものという。地蔵堂には６体の地蔵と１体の観音が祀られている。同じ時期に作られたものと考えられる。地蔵の１体の光背には，「嘉永三戌年　中村孫太夫　松野忠五良」（１８５０）と刻まれている。

地蔵堂の隣には「ごりんさま」と呼ばれるお堂があり，五輪塔や社が祀られている。

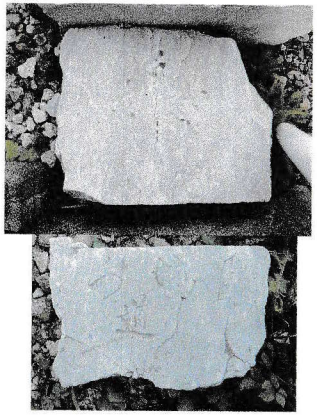
９５　秋葉山常夜灯

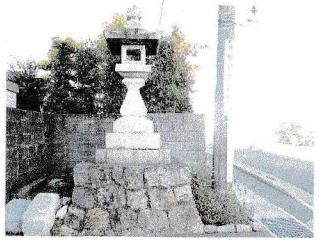
秋葉街道沿いに建てられている。正面には「秋葉山常夜燈」，右面に「明和六己丑十二月吉日」（１７６９），左面に「志主　柴本村中」と刻まれている。火袋には「∴」，日，月の模様が彫られ，火袋受けには，剣菱，雲型文模様が彫られている。

秋葉街道は，秋葉山常夜灯のすぐ北で二つに分岐している。右側にとると，於呂神社の東をぬけ，西鹿島駅前から鹿島の渡しへ至り，左側にとると，接待茶屋を通って鹿島の渡しへ至る。

江戸初期から中期にかけては，於呂神社東の道を通ることが多かったが，中期以後は，接待茶屋の繁昌がそれを裏付けるように，参詣者の往来は山寄りに移った。

左側にとると，新道と合流し，北へ進む。





９６　秋葉山常夜灯・道標

浜名湖北気賀から本坂道（姫街道）と分岐し，三方原，二軒家の茶屋をぬけ，宮口を通ってきた別の秋葉街道が，根堅で合流する。合流点には，明治２４年建立の秋葉山常夜灯がある。その脇に土台石と共に，２つに割れて横たわっている道標がある。道標には「右　半僧坊　左　はまゝつ　道」と刻まれている。元南側の酒店の角に建てられていた。

＊令和元年、元の酒店の角に復元された。建立は明治２６年９月の道標で、３名の名がある。

※秋葉山常夜灯は造成のため、取り除かれた。

９７　道標

岩水寺参道と国道が交差する根堅大門交差点の南の角に，花崗岩の道標が立てかけられている。四つの面に「→濱松　←岩水寺」「→半僧坊　豊川　←二俣　秋葉」「御大典記念」「建之　岩渕喜□　松下忠□」と刻まれている。置き方が実際と９０度ずれてしまっている。

＊現在、撤去されている。

９８　道標

岩水寺参道の西側に森林公園入口の標柱があり，その脇に建てられている。高さ１２７ｃｍ，幅４１ｃｍの堂々たる道標である。表に「除厄　薬師如来　子安地蔵菩薩　岩水寺　是よりおくのいん　いわあなへ三丁　鹿しま舟渡へ　通りぬけ」，裏に「施主　尾州名古屋　杉屋佐助　丁弘化四年未正月吉日　石井大蔵」（１８４７）と刻まれている。

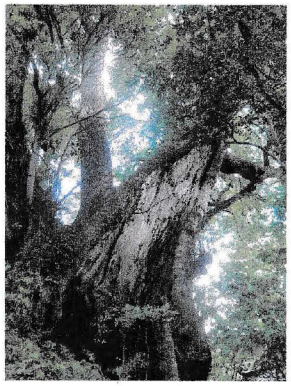
９９　根堅遺跡

岩水寺西に石灰岩採石場跡がある。昭和３５年石灰岩の採掘中にトラやヒョウなどの絶滅動物を含む動物化石や人骨化石が発見された。「浜北人」と命名された化石人骨は，約１万４千年前と約１万８千年前と判明した。本州で発見された唯一の旧石器化石人骨である。

子安地蔵堂

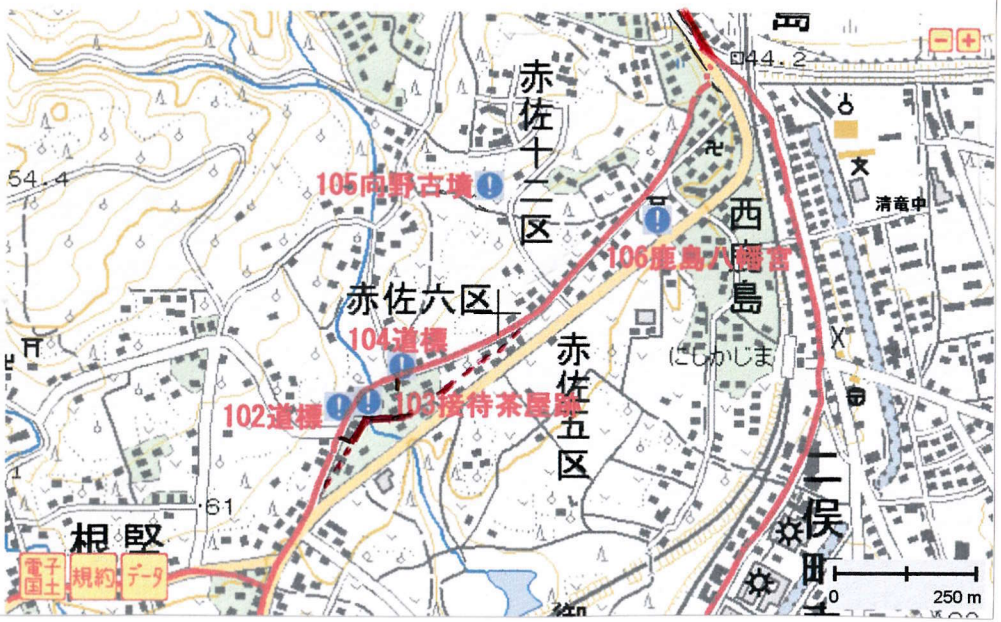
１００　岩水寺

行基開基伝承をもつ真言宗の古刹である。坂上田村麻呂伝説のある子安地蔵菩薩像（鎌倉時代造像，田村麻呂の寵愛を受け，一子俊光をもうけた赤蛇の化身である姫を写したと伝わる）が，安産・子育ての信仰を集めた。元亀３年（１５７２）の武田軍の焼き討ちでほとんどの建物が焼失した。境内には，地蔵堂，薬師堂，大師堂，白山神社などが並ぶ。また，根堅詣りの中心として武運長久や弾よけ信仰を集めた地安坊大権現がある。(地蔵菩薩像は国指定重要文化財)



１０１　白山神社のクス

岩水寺境内に坂上田村麻呂を息子俊光将軍を祀る白山神社がある。御神木が白山神社のクスである。クス材は建築，家具，彫刻などに用いられ，葉と材片から樟脳がとれる。白山神社のクスは落雷により主木を失ったが，樹皮部分が残り，中が空洞になっている。高さ２８．１ｍ，根元回り約８．７５ｍである。樹齢は推定７００年。市指定天然記念物。



宮口からの秋葉街道と合流した後，右にカーブしているが，秋葉街道は左斜めの細い道に進んでいく。
（旧国道 大正時代に開通）

・旧秋葉街道は新旧国道の間を通り、御馬ヶ池川まで下って、橋を渡っていく。

１０２　道標

接待茶屋の手前，歯科医院の裏で，秋葉街道より西の奥に１０ｍほど入った小道にある。花崗岩で上部に長方形の窪みがあり，その下に「奉納岩水寺地安坊大権現　ちかみち四丁」，左面に「豊西村貴平千鳥園定利」と刻まれている。元はもっと南にあったという。

１０３　接待茶屋跡

接待茶屋は，秋葉山への参詣者の休憩所であった。石灰を生産していた芳田家のあるじが茶をふるまって接待したという。寛政年間（1789 ～ 1800）から明治３０年頃まで１００年近く続けられた。このことからこの付近を「接待」と呼ぶようになった。

１０４　道標

接待茶屋から７０ｍ程進んだ辻にある。茶店を出していた芳田家の当主が道案内のために建てたものだという。石灰岩の道標で，「右あきは　左　阿多古　道」と刻まれている。阿多古道との分岐点である。阿多古に向かう道は，現在途中で途切れている。

現在は、石垣の上に置かれている。

１０５　向野古墳（むかいの）

林業研究センター内の南斜面にある直径１８ｍ，高さ３ｍの円墳である。大きな切石を組み合わせて造られた両袖式の横穴式石室（長さ５．５ｍ，幅１．９ｍ，高さ１．９ｍ）が開口する。羨道部はすでに失われているが，石室入口に立柱石を配する。築造は７世紀代であり，他に例を見ない畿内型の横穴式石室である。市指定史跡。

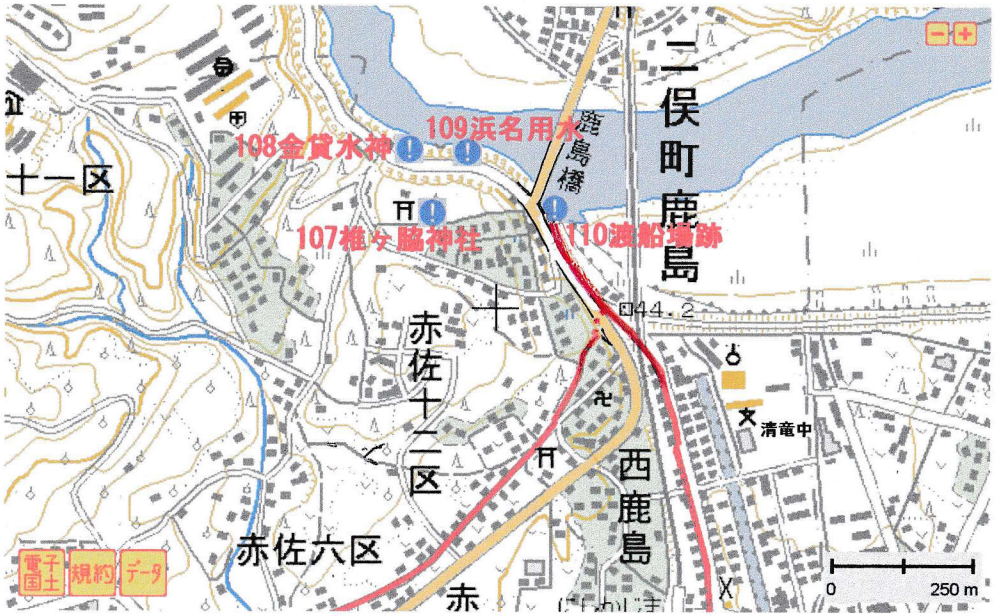
この古墳の南には，（向み）かつて金銅透彫金具（冠帽，重要文化財）を出土した涼ノ御所古墳があった。これらの古墳に葬られたのは，中央の政権ともかかわりの深い貴人であったと思われる。

金銅透彫金具（模造）

１０６　鹿島八幡宮

鹿島八幡宮には，伝説がある。徳川家康が武田軍との戦いで浜松城へ落ち延びる際，当八幡宮の社の曲がった松に家康が鞍を掛けて休んだと伝えられる**「鞍掛の松」**があった。現在３代目の松が植えられている。

また，楠の下から湧いていた清水に，家来が手ぬぐいを浸して家康の体を拭いて涼み，休んだと伝えられている。当時この地を**「涼の御所」**と言い，今も地名（小字）としてその名を留めている。現在この湧水池は，静岡県の湧水百選に指定されている。

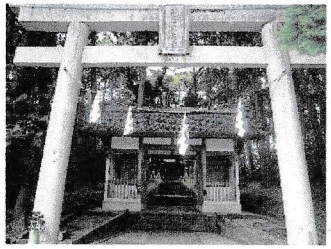


秋葉街道は，途中から更に細い斜め左の道を進み，椎ヶ脇神社に向かう交差点を曲がらず真っ直ぐに進む。人家をぬけると新道の真上に至り街道は途切れる。新道ができる前は，この先で於呂神社の東を通ってきた秋葉街道と合流していたと思われる。迂回路は右手の急な階段を下り，新道に出て，渡船場跡に向かう。

更に斜め左の細道へ

真っ直ぐ進む

迂回路は右の階段へ



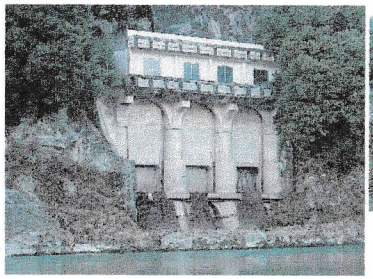
１０７　椎ヶ脇神社

鹿島橋交差点南の石段を上る。坂上田村麻呂が蝦夷追討の途次に天竜川増水のため渡河できずにいたところ，付近の人々が筏を提供した。そのため無事に渡ることができたところから，川の水が引くことを願って「闇淤加美神」を祀ったと伝説がある。

鹿島橋の南から石段を上った鳥居の奥に，船越一色村と池田村から奉納された２基の灯籠の一部が残る。一つは正面に「御寶前」，左面に「當國敷智郡舟越一色村　渡舟方」，右面に「文化十四丑十□□」（１８１７）と刻まれている。更に，もう一つは正面に「御寶前」，右面に「施主　池田邨中」，左面に「寛政十戊午□□」（１７９８）と刻まれる。水運に従事する船頭や水夫などの信仰を集めていたことが分かる。

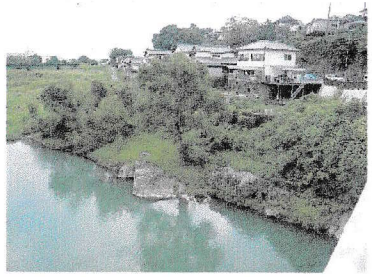
１０８　金貸水神

病気を担保に金を貸す水神が祀られている。由来によると，明応８年（１４９９）のある日，天竜川が氾濫して水神様が流れ出したのを見た船頭が激流に飛び込んで救い，現在地に祀った。しかし船頭は病気で重体になったが，水神のおかげで全快した。更に他の者も病気を質とし，借金証文を上げれば期限までに必ず全快させるとのお告げで，人々の信仰を集めるようになった。



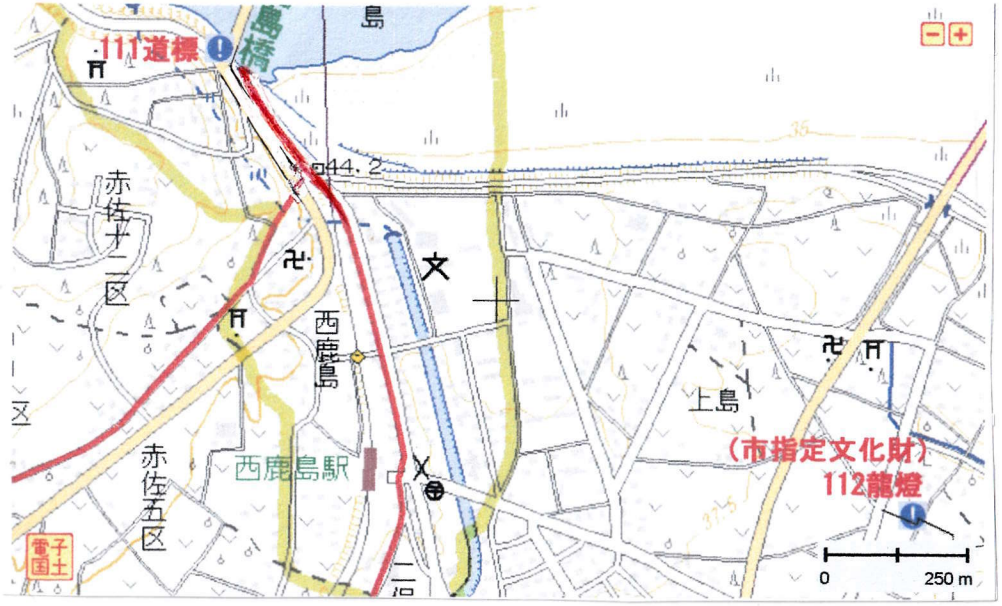
１０９　浜名用水取水口跡

天和３年（１６８３）椎ヶ脇神社の下の岩山を掘り抜いて新原村まで天竜川の水を通水しようとする計画が実現しなかったことが書かれている古文書が残っている。昭和になり，天竜川西岸の耕地の用排水改良事業を行うことになり，戦時中より難工事の中で昭和２１年６月に竣工し，水源の安定的確保が実現した。その後国の事業により，取水口は船明ダムに移されている。



１１０　渡船場跡

江戸時代は「鹿島今津之渡シ」といわれた。徳川家康が武田軍との戦いの折，庄屋の田代家の先祖が竹筏を作らせ，家康の危急を救ったことにより，鹿島（北鹿島）村は渡船の営業権を与えられた。船は払い下げの大船のほか，角倉舟の小型の「差波船（さっぱ）」と呼ばれた船で，２５人ほどの船客を乗せた。船賃は江戸時代中頃は一人８文であったが，幕末頃は一人７２文にもなった。７尺（約２ｍ）以上の増水があった際は，川止めとされていた。明治４４年，天竜橋（吊り橋）の架橋によって渡船は廃止された。



１１１　道標

鹿島橋の国道１５２線と天竜東栄線の分岐点にある。上部三分の一のみ地表から出ていて下部は埋められ見えないが，正面に「右　二俣　光明山　秋　葉山　左　上下阿多古村　熊村」，右側面に「大正十二年八月　西熊之助建之」と刻まれているという。西熊之助は二俣の西古町に在住していた。元はすぐ上流の天竜橋（明治４４年竣工）の分岐点にあったと思われる。鹿島橋は昭和１２年竣工である。

１１２ 新田組龍燈（市指定文化財）

新田組龍燈は，明治３５年１０月，当地の大工棟梁渥美長吉と永島に住む弟子の伊藤宇作によって再建された。

屋根は入母屋造，桟瓦葺で，棟には鯱を載せている。軒の垂木は扇垂木（２層），欄間には，透かし彫りの彫刻をはめ込んでいる。龍燈の中には，灯籠は置かれていない。最近、屋根が補修された。

↑

彫刻の題材			彫師	
	南面	龍と馬上の武者	彫師	大村藤吉朗義秀
	東面	鍾馗の鬼退治	彫師	六村正□
	北面	鷹と虎	彫師	不明
	西面	唐獅子牡丹	彫師	不明

＜参考＞

根堅　雲岩寺組の龍燈

善地の龍燈